

「ホップ、マイリ」 ——ウズベク流処世術の機微

帯谷 知可 (おびや ちか)
地域研究企画交流センター



タシュケント旧市街のバザール

さまざまな場面に登場する 「ホップ、マイリ」

ウズベク人とウズベキスタンをよなく愛し、ソ連解体後いろいろな困難がありながらも長年暮らしたウズベキスタンをどうしても去ることのできないロシア人の女友達が言う。「まったくウズベク人の「ホップ、マイリ」ときたら！厄介なこと、この上ないわね」。

「ホップ」と「マイリ」は別々の単語で、「ホップ、マイリ」というフレーズで使われることもあれば、それぞれ個別に使われることもある。文法的には「ホップ」は間投詞、「マイリ」は形容詞だが、それぞれよく似た意味をもっている。基本的には同意・了解・受諾などを表す。訳は文脈によるので実は難しいのだが、「わかりました」「いいよ」「OK」などというのが最も一般的どころだろう。しかし、いったん現実の会話の世界となると、

この「ホップ、マイリ」あるいは「ホップ」と「マイリ」は実にさまざまな場面に登場し、さまざまなニュアンスを帯びる。ことなる。いくつか例をあげてみよう。誰かが依頼や命令をしているとき、しばしば聞き手は話の合間に「ホップ、……ホップ」とあいづちをうつ。「いいですね、必ずですよ」というような念押しの場合には今度は話し手のほうが疑問を表す「ミ」をつけて、尻上りのイントネーションで「ホップミ？」または「マイリミ？」と言う。電話を切る直前に「では、失礼します」「じゃ、またね」という感じで「ホップ」または「ホップ、マイリ」。バザールで買い手に値切りに値切られた売り手が最後に発する「マイリ」は、「しよ方がない、まげとくか」ということである。私の目撃した一場面では、父親にたばこを買に行つて来いと言われた少女が、一瞬いやそうな表情を見せたが「ホップ」と言って、お店へ走つて行った。

「ホップ、マイリ」の行間が 読めるようになったら……

そして「厄介なこと、この上ない」のはなぜかということ、同意・了解・受諾といつても当然喜んでする場合としぶしぶする場合があつて、年長者や客人に対して決して逆らわないことを美德として対人関係を維持しようとするウズベク人の「ホップ、マイリ」が、極端な場合、実現不可能なことに対しても「ホップ、マイリ」と言つていたり、実は婉曲な拒否であつたりしたことに、ずつと後になって気づくこともあるか

らである。それでことを荒立てれば、彼らはやはり対人関係を損ねないよう、長い説明を自分自身に非のないことを訴え、最後には結局また「ホップ、マイリ」にいきつく。

くだんの女友達はこの「ホップ、マイリ」に何回も痛い目にあわされてきたというわけだ。しかし彼女いわく、「東洋じゃ、ものごとはしごく繊細つて言うでしょ。それがわからなければここでは生きていけないし、だからこそ、ここで生きていくのがおもしろいのよ」。いうなれば、「ホップ、マイリ」の行間が読めるようになってきたら、ウズベク流処世術の機微が少しはわかってきたということだ。私にはその道はまだまだ遠そうだけれど。



バザールでは「ホップ、マイリ」が毎日数限りなく繰り返されている